抗 f と抗 c を保有した一症例について

◎岡本 彩[1)]、重山 郁子[1)]、遠田 久美子[1)]、小川 哲[1)]、坪田 誠[1)]
石川県立中央病院[1)]

【はじめに】f 抗原は c 遺伝子と e 遺伝子が同一染色体上にある場合に限って発現する抗原であり、その抗原に対する抗 f には免疫抗体と自然抗体の両者の報告がある。今回、頻回輸血の患者の血漿中に抗 f と抗 c を認めた症例を経験したので報告をする。

【症例】患者は 75 歳、男性、輸血歴あり。X 年 1 月より汎血球減少を認め、同年 7 月 21 日に低形成 MDS と診断され輸血依存となる。血液型は O 型 RhD 陽性。Rh 血液型は DCCee。X 年 11 月 28 日、12 月 15 日の不規則抗体スクリーニングにおいてフィシン法のみで陽性となり、精査のために試験管法で検査実施を行った。結果は 11 月 28 日は陰性、12 月 15 日にはブロメリン法のみで凝集が認められた。不規則抗体スクリーニングの反応性より抗 f を疑い、輸血は R1R1 の製剤で対応をした。X+1 年 1 月 12 日には LISS-IAT でも凝集を認め、試験管法で精査を実施した。その結果、患者の血漿中に抗 c が認められた。抗 f の存在確認のために R2R2 の血球で抗 c を吸収し、その後の上清で検査を実施したところ、抗 f の存在が確認できた。X+1 年 5 月 22 日には抗 c は検出感度以下となり、血漿中に認められる抗体は抗 f のみとなった。X+1 年 9 月 11 日には抗 f も検出感度以下となった。赤血球輸血は現在も R1R1 で対応をしている。

【まとめ】複合抗原の ce に対する抗 f は自然抗体、あるいは輸血歴や妊娠歴のある患者に抗 c や抗 e と混在していることが多い。今回、は抗 f に加え抗 c を保有していた患者に対し、R1R1 の赤血球製剤を選択することで輸血は問題なく施行された。

連絡先—076-237-8211（代）